提醒紀談

卷四

曾5
73
4

相模屋本儀

提醒紀談巻四目録

倹素の家風
丹前風と呂嬢
古鐵函
小松彌助
肥後那須あくびか来艮
乞児の言
夢覚北関
池田勝入
若狭の八百尾
竹簪
足利学校
玉北仇と討しゝ女
肥後の五家庄
安ち持方
大恥小恥乃辨
偽いさね役人
諸司代

提醒紀談巻四

江戸　山崎美成　編輯

儉素の家風

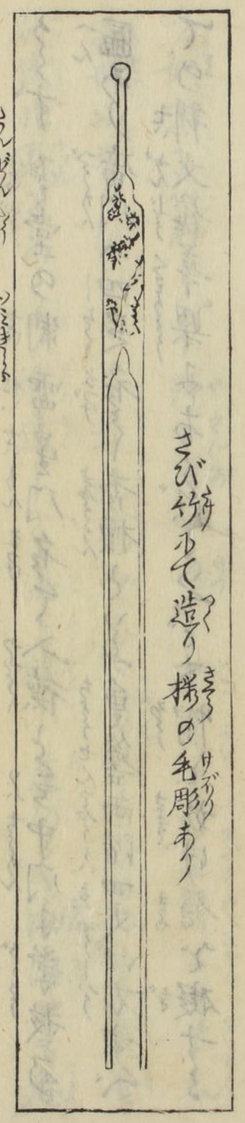
○井伊掃部頭彦根へ初て入部せられし時諸事儉約を第一とせられ自身より木綿衣服を用ひ家老とそれより大身あるものへ手づから木綿の布子羽織などをあたへられしも名美服を著するものは恥をおきまゝ恥ずかしとあり其城の塀幾ひろげ石垣とつき直しの中渡されなどとぞ聞く法度おあるゝ衣類と著用いろ〳〵中渡されなどとぞ聞く法度を用ひずして美服を著するもの多くしかゝる因附の考よりも自らまた不行届なつけ出ずれば何とをいたゞ不意より場の泥とぬ

まつけいよ〜　明良洪範後編

竹簪

○関氏世〻書を以てその名高〜祖先鳳岡の侍ハ平已よ名家畧傳よ考る〜〜り鳳岡の子南樓を家君年谷翁の師なり南樓の弟子渓南名ハ克明その嗣とあるそれ子東陽平と同庚交情殊よ厚く冥逆の友〜りその家竹簪を蔵す侍へく之潢南の曽祖母あるる人享保中

有徳院様よ宮づ〜セ〜よその氏反質の政を移さセ給ひ〜おゐる〜宮中の婦人ハ契の飾小金銀を停止セ〜められて竹あて簪を造りすべ〜の女中よ賜ま〜あとで平〜〜に目撃すと〜墓〜〜こよ載す



丹前風を呂嫗

○寛永年中の事あ〜〜が小情動を情景憲が実子かきを以て何某の次男と養子ら〜〜るその氏若輩ハ面こハ丹前風ら〜〜袋の結やうより大小衣類よ至る多て異やうある風俗あり〜〜小情が養子も若年の事也忍そ丹風をまなびく袍二面を刑て袋をつくろひくるを父景憲えとがうてゆハ若輩ある化ども武士の家よ生ま〜れ〜〜〜二面の袍をもてくさちをつ〜〜ろふと遊女師匠の和為ありと之

腹〳〵義絶せられこの人武功はおほいなれどもその人のゆるせ〜
事なり乱舞も功者あれど外細工もよくせられず

明良洪範後編

足利学校

○下野國足利にある学校は往古小野篁の建るところ
なり年を経て〳〵浮永享年中上杉憲実戦争の世に當
て学校をふたたび修し多く古書を購ひ収て蔵す
今よりして〳〵揭存せり これより依て文士常に来るものす
くなし 聖堂の制面皇門名て入徳とこの中門は学校乃
匾あり 廟門は四足名て杏壇といふ重簷両階四丈四方すべ
ての制文様華麗なり 婦人ども帽を妨げ肩を礙する

の如きはあらず 野之任と称く 死食す 蓋邦公の学文
當世ふかうびをく至孝純忠あり 初ひすがられ遣唐
副使に選はれ 發遣して海上飄泊逢ひ渤海を超
ずその事遂ざりしが唐人沈道固これ名を変くすが
ら詩を贈まりとやうれば孔廟に死食するもあり
らしかれども野公の嘗て此地は國司那司に任ずるを
あり何為に学校を建るといふことを知らず特めべ
とて博毛奇賞ありて按ずるに孫貞大草子は足利学校は承
和六年小野篁上野の国司にて附勅諸のよしと記すと
いども公卿補任は承和五年十二月十五日止官配流隠岐
國同七年四月召返六月入京被黄衣以拜謝同八年閏九月

十九日復本位正五位下とありかれハ承和六年ニ隠岐國へ配流の中ハ位國の事とするものハことより妄説あるを辨じ考ふべ管陸奥古左〻ことあれハ是利学校を建ハるの時ハ事あるべ

古藏函

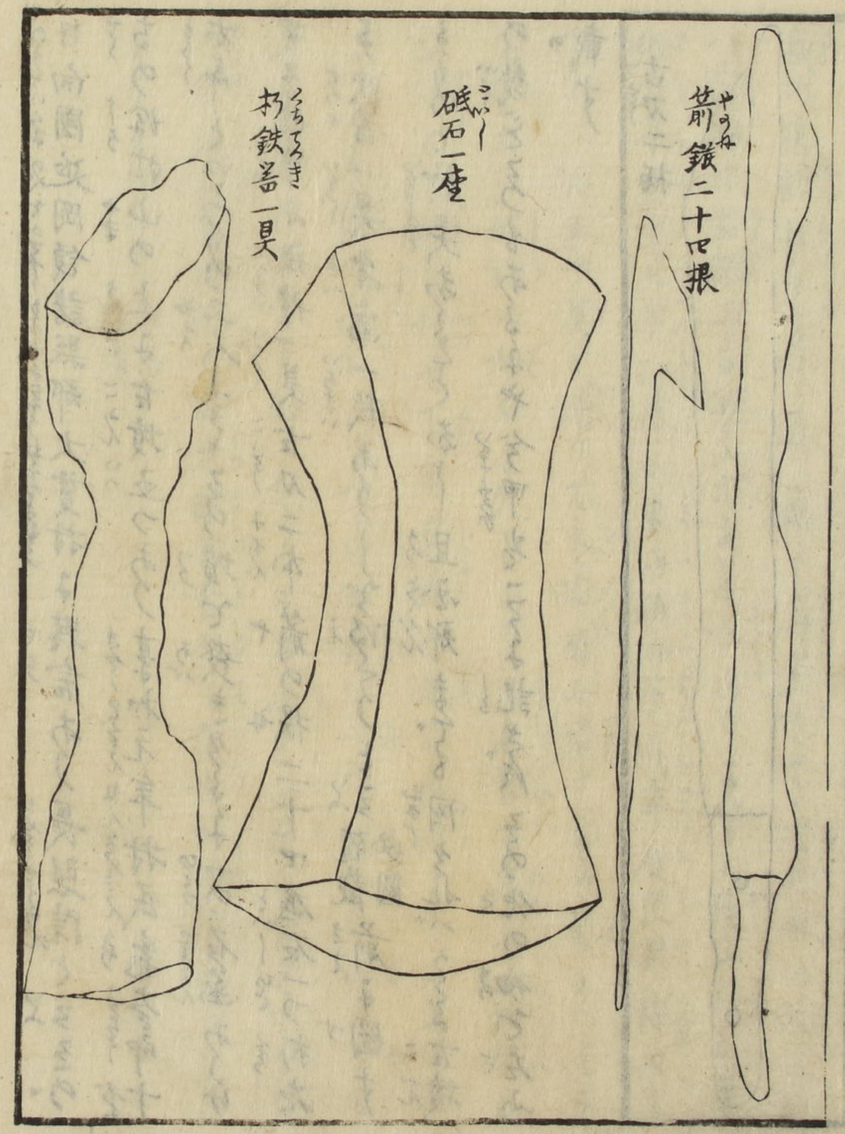
○日向國諸縣郡なる本庄小泉地ハとふをろよ小阜あ
り寛政元年巳酉の歳正月同じ郷の六日町の農夫ハ川流
弥右衛門ところ掘れるの小阜の下ハ水と通し田ハろ〻と
て地と掘るとき数尺ハ〻〻ハ穴あるところ掘りるの中ハ圓壇
きんまいさま三枚刀の才七本鉄の甲冑二具曲玉若干ろれ外鉄板とる
をのくるぐ〻あり扨て穴の中ハ四面ろを赤く一斤ハ板ハ

ろ〻り土人の傳説ハ寿永のむ〻り安徳天皇を乱と
逃〻此地ハ逃走ありしハ終ハ崩御ありしとふ
とろりされを事の山陵ハ多ごりあやとこさく鮫鏡佩玉ハ
のくハ姑くさく今ハの甲冑のきをを見るハ上古の甲ハ鉄
板と以て打ひ〻造るとく安徳ハ蔵する上
宮方ハれ玩甲延喜式および考古記等證とすべ〻その好者
北朝ハ〻〻〻全胴と稱するものあるこれ鉄ハ〻〻製するとこ
ろ〻り又世ハ傳ふるところの古雅を以て推し考ふる安
徳の朝と距ること百有餘年安徳ハ以ハ二百年あり
未勇て三の鉄甲の製れ如きものあるとあ〻ハ疑ハ
俱ハ存るところれ鏡背の奇古と刀形の変制とを突ハ千

歳の遺説自存ち〻に孔子に依て再案ずるに安徳帝の陵はさ
ハ當時は古塚ありもあるべきと明あり〻よろ〻〻情ふ續日本
紀天平宝字六年正月に東海西海芋道節度使料綿襖冑
二萬二百五十具を造りてた宰府に遣すその製ゆつた
に唐土の彩掾の如くにとあり又延暦十年六月鉄甲三
千領を諸國に仲せ下す新撰に依て修理すと云へるも
こてに唐國の彩掾といふものを打て以て鉄葉を綴ひ令せ
るものといふこと知れるを尚書正義に古之甲冑皆用羽毛以末有用鐵者而兜鍪字皆从金後世始用鐵也とい
よろ〻〻あり 鐵函圖考

日向國延岡領諸縣郡大貫村に落合あり長照院といふその
ちの塚は山の上に古墳五つあり其和元年村民発掘十
左衛といふもの二人あり〻その墳を發き〻に一の石函ありけ
里に其中に鉄鏃一具古刀二本箭の根二十四礎石一つ打た
る鉄器一具牙歯一枝あり〻を浮〻と云隨觀前に図す
るものと聊異あることあり〻且郡まで同〻れば〻る古墳必圖
の幾ところもあるにや今甲に〻に記さべ〻その他の物を左ふ
載す

古刀二柄



主の仇を討て下女

○大久保家代々勇士なれど女中老ある時ちがひの事あり
里を女の年寄大に怒り罵りて扨撫おおびぬる此中老
ひとり言に これまで親ゆゑ こうれしとハなきものといひ
つゝ部屋に閉じて文を書て下女二人よりて親のもとに
遣りぬ 一人の下女やう一人を主の側に残りあんとこゝを
大事のことをひやる文なりとて強て二人とも出しやりぬ
度すがゝあやしくて常に二人とも一文に出きることもおぼ
えずして顔色もなくなりずしてありしとて竊に文をひらきて
見るに なるべくの子細あり自害するなりと書のせうの事を
さくこそあるべくれども一人ハ主しと使よりく行れよ我ハ仇

て止めべしとて多きうちて足もとゆく自害しまゐらせ
うば死骸まを夜のあけうちうけて小脇指ぬき血を拭ひうば懐
ふさしてさまうぬ仲あく年寄の部屋より彼き語りや文事
のい性今部屋まを来ればいひ不孝なく徒くづきありこ
いひうれぞ改り又彼て数度まを及ひしうば年寄何人あく来
まて夜のおとうやれば朱まそて中老ハ死しうその時
彼下女これハ今日の事あくうハ自害まおよびたるあり立
の仇ものといひもあんず脇指をぬくまやく刺殺しうう
迷ぞ女人を殺しうあやとの疑ひやう捕れて糺し問ま
いきふところより多とうう出し證拠ハこれあくゆと始終の
やうすをつぶうまいひ述て主の仇をハ討ぬうまひおく

ともなくいとて強く色もかうくしぶあり大きな女中ども
と殘らぶふべ彼中老の下女の事いぶ却ふやと易さまら
るまを出義とひけるぶふ驚きへうたるまを
そうくて沈れぞさうばいさせんおのく存ずるあねあうばや
ぶしとあうしまいうを存まうもあうしと中すさうばこの女
のちううき誉まを言葉をしといもん今年寄死しうう事うけ
やれば弟年寄まを立て右るべううんとて性出して賞を
形迹ぐうとぞ草
按ずるまこれ係を蓬山とふ淨瑠璃の語ひそのまを仮意セ
しう孝履折とふ事ハこれやうれ幸授あうべしとぞおも

小松弥助

○紀州家士佐藤何某ハ好古の人なれば遊歴しつゝ筆記するところいと多くその人の語りしを紀州もゝ元来山多くして遊歩も容易ならぬ故平地化よりとく年を経ひらけたる熊野ハ山中小平家ハ浮島ひそまり居るよりうれて安およびしやゝ或時用をして最ねくるよ熊野より那智の瀧壺へ行く程十町ばかりも手前より脇へ入て半程ばかりも行ば岩の鼓といふところあり山河ハ二ふきり落る流れ前浮ハやがてうるゝ中ゝ島の如き山あり此ハ小松重盛の嫡維盛朝臣の後胤なり水清左衛門と云ハ小松重盛の後胤なり

と申伝へしを此清左衛門方ゝ聞ゝ元暦の昔維盛卿熊野ゝ入ゝ夫より那智の海ゝ沈しと偽り遁走ゝ訓等三人と山深き民家ゝ隠れ居んとて来りしゝ人ゝ山やう我家ゝ入ゝ清水清左衛門といふる家のもとゝ連れ行ゝ野ゝやゝ清水清左衛門ハ引てゝ山ひしゝ捨このゝ里ゝ住しゝ夫より此地ゝ居住て陸家ゝ養ひ給ふ程ゝその三人の内ハ何れも平家の家人なりしゝやゝ子の中ハ一人ハ嘉幸の者とハ見えずいかゝも貴人と見れしゝ石清左衛門一人の娘ゝ妻ゝ聟とせしゝよりゝ男子出生しゝこの時ハ三つゝの人ゝやう我こゝ小松維盛なりとてむかの幸ゝ清左衛門ゝ安ゝ養て野

あるんところありひとれ此上をろまぐうやうよ隠れたて
もつぐき附帯あるバ名ともあげ永とも立ままちん事まき
あるずこのまるあるハあるるぐるずらるず夫より甲冑
とたじめ武器ごもと用意して有りるの附よ造るる云
其ホ今もあり拵ひるの器とも見るふるるる平氏の
紋付ようるれ子孫連綿しる代を清水清左衛門と称せり
あるるもふ何代めふや元亀年中の所ふう兄弟二人あり
てるれ弟ある若ハ人猛き生質あるるるぐ嘗時乱世ふれ
バ今この時よ乗じるる事を起るる名をおこるバやとなひ
て兄よ此よるるをやるれども兄ハ正直のこるる再興の志る
いるるうふるれバるの事るるるふ因ておるるるるるるるる

ぞ第一人ありとも事をもちらんらるる暇をるる立出でお
縁あるる同郡日高那よあるるふ松弥助と名乗り郷民おを
発り集めて終よ万石よ及ぶまで押欲せるとあるるの好変
長の末よや
東照宮この事を賞るる家拙の者あるるとるるのまる
る安堵せられるふ今よ家冥ふ松の正統の如くる
てを郷の人ハふ松反と称するるるれども弥助ご家
よハ武器を社外の調度の数古拙らるるハ一品もあるる兄の
清左衛門方よハ侍来社古器多く遺れる今よさるるある
義の鍛冶を欲して世よ知る人まるるこの二人の刀鍛ハ陸
地とるるるのあるるよる

明良洪範後編

按ずるに此の條まこと義経千本櫻と二浄瑠璃に維盛が飯
屋の婿となりて弥助と名乗る一段はこれらの事を作り
せしあらべし平書に院本とあり勸善懲悪といふは盂蘭
盆あり嘉青の人まく婦女子を扮演曲を聴その劇場を
觀るすべく勸懲よりは人心を感ずる事
のくるしき感ずるはいとよそや烏呼これよりさきても俗に所謂
人情本といふものの禁ぜられしは有ざるを御按ずべしあれ

肥後の五家庄

○肥後の隈本より逢坂せしころ五ケ村の事を尋ね問ふに寿永
年中平家の人々都を落て須磨の浦形なども義経に破ら
れ又讃岐の八島よりてもち負長門の赤間が関に海上にて

一門のこらず入水し被虜しもの実は肥後の五の深山に
隠れ住くらうるの浮世の中蘭倉より海を渡て平家に仕へ
永く山中の士と打果てぬるのの隠れしところ今の五家庄
あり南北およそ二十里ばかり東西一二里もあるべし東は豊後
山は河蘆南は求麻西は隈本なり何方よりかるるも二
十里餘りもあるべくその險阻は中々いひつくすべきもあらざ
れども平家の人々は子孫年々繁
茂しつゝ数千万人に及び年月は数百年を間一向人間乃
通路は絶て居るしが是利の未みや豊臣家のせめやぶ
るゝ人川上より挑の赤れ来るを見て此の山奥
に人の住るるを知りやうやう尋ねいりて始めて此五

赤虫の人この世より過ひさりしと云う彼地の人の世間へ出て
人交りをせし始ハ元和寛永の比まもや此あたりゆくハ隈本
名家あれバ此をも篤しく中ごろ公ふもその由少
ゝぶけら出て肥後の支配とし〜ゆふされどもとよりその外ま
れバ何方の領分ともいふもあるべき支配といふのこのあり
ほハ毎年隈本より鹽幾十俵と賜ふ彼方よりハ五人の頭分
のみ礼参りゞく年始の礼詞をつとむるよりハ隈本より出るか
皇熊の皮十枚礼物とし〜〜年毎に進ぜすきゝ〜より彼地
ハ五人此所にあり中ごろ此地を五つに分ておの〜一ヵ
を引り保つこのあるよ世人五家持とよゞく云その人こゝ質
朴ゆゑ〜武をたゞけ云男子ハこゝ長き丈ひを帯すこゝろ

辛家言貴の人此事葉あるして言ひ〜世人を軽んずゝ社
その地鹽ゆゑ〜をゝまでハ数百年の間この地此人ハ一人も鹽
味を知るものあるゝ〜を未ハ隈本より賜る鹽を分ちて
食すその外も格別赤冨なるハ肥後より鹽を買入れて食
料とゝゝゝれバ生排底ゆゑ〜まくまでハ行届ゝゝ然れども鹽ハ
食ゝ〜〜生ありとゝゝゝよや百姓の家〜〜ハ何れも見鹽として紙
ゆゑ〜の鹽を色〜孝和の拵ゆゑ〜おきゝ〜赤内こゝ毎朝こ
の鹽をゝゝゝゝゝゝゝゝ地ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ〜年貢
を納るゝゝゝふゝゝゝゝ穀物ハこゝの地産きゝゝゝゝ拵出年
ゆ俗ハ云ふ有ハ又賦役ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ故人の心ゆゑ
云食もあるゝ年ゝゝ〜〜年ゝゝ上古の世より似ゝゝゝゝゝゝ

平家傳来の宝物宝ゑ〳〵樂器刀剣世よ珍〳〵きものあり
とゝ化人ハ一向よりつることゝ許さず又そゝひ入りても富るべき
家なれバ雅義よおよぶとゝ雖ども悪業の事よおろそゝ
る敬よ醫者をゝるとゝをゝるゝ被地よゝるゝとあれ
ハ宝手んゝ愛せらるゝとゝ

記

同國那須ゝゝびよ米良

○五家庄の南ハ連りて那須とゝゝゝろありこれも同く平家
の人〳〵隠れ家ゝ〳〵景家庄と国やうのゝゝろあり熊本よ
里を宝遠く求麿よりハ七〳〵およそ十八九里二千里ばかりも
あゝゝと城下の人ハゝ求麿の城下よりハ東北方ゝあゝ
る余ゝ求麿よあゝ〳〵時被家中ハ那須伊集とゝふ人あり

殊よ親〳〵交り〳〵その人ハ先祖もこの那須の名字た
る〳〵ふ五百年前ニ此地の君相良ハ御祖先求麿よ入部あ
る〳〵より那須も出〳〵客分れ列よありて次く城下よあゝ〳〵
数代尊貴を蒙り〳〵よ終よその家臣よゝんとをゝが
ひゝ〳〵今の伊集よゝるまで数十代義まく仕へゝるありこれ
も元平家よりゝ被傳の宝剣ゝども今よ伝指子り此地と那
須と名分〳〵中来ハ平家赤間ヶ関没落の時山中よ隠れ住む
よ〳〵孫為よ洩れ出ゝ〳〵ゝ我朝々より那須與一宗隆ゝ舎
弟伊集とゝふものよ命じ平家の餘黨追伐のゝゝあり肥
後よ下〳〵ゝふ那須集ニハ地よ下り今味せ〳〵ゝ平家のゝ
ゝ幽なる伴あて再び事を起すべき氣ゝ出ゝ〳〵ゝ

那須もあたれの人生じ雑人の首ずく討て滅せ平家の餘
類殘らず追伐し孫と孫兼ハを披露し平家ハ人とよハ
こゝ我那須の名字と讓りあゝこのこの芽ハ已ぶ家族ゑ
星と披露しゝそれ才も年久く此あゝよ家ハ住てゞう
その塚ハ孫兼より坐味おく平家の人とも美ずく一生を
過しゝ人とその塚平家の人ハ子孫も連綿らして お續せ
星那須ハ子孫も繁育しゝ家とるよ那須を名乗ずれり
この地元来地名もなき深山幽谷をこの人こそ初めて住居
ハ地とおりしゆゑやゞゝその人とハ名字を称しゝその後よ
那須といふあり此那須ゑ陸りて高谷推葉山米良おゞゝ
ところもありこゝ昔の高人の住家のあとまりとゞ同
上

その内米良ハ九州の菊地没落しゝ此山中ハ隠しゝところか
り天正慶長の頃関東より領しゝ来る所乃地
とそのまゝ賜ひゝ交代の家よりまゝ此米良ハ地廣く
して境ハ限りもなく十里二十里ハ跨るとゝごもこゝ山
ふゝゝ平坦の地をゝとよりゐるゝあとても詩るべき
地もなく又外より入来る人もるゝさハ婦女を一生涯馬
とゝぶるものあり又嶮岨のところあるまハ駕籠も領ゝ
の乗りゝ入駕籠ハ底なしの竹籠ゝ長ハく縄を巳筋下
て長と引る嶮岨乃坂と上下するゝゝこゝも縄ゝ引り下げ
る籠なれハ前塚へ自由ゝ働きて内の人落る患かるゝ
ゝれども両の降ときハゝゝ長ゝよ其笠ゝ長ゝ平ゞ

友人米良へ行しし時ハ此籠より乗りしと云雲山高谷ハ
米良の支邸なり五ケ所ともよ五家庄屋なるを地頭もなく年
貢もなし　同上
按ずるに古より世を遁け跡を晦ます人少なからず平氏の
逃れ隠れて深山に入こもれる者あるとてその幸こゝろ〳〵に
よりなるべし一二をこゝに記すなり猶いとゞ出羽國米
沢の北二十里ばかりに小忠と云ふあり是も池大納言乃
裔と云なり能登國附木村に平大納言の子孫あり且
安徒帝西海に沈ませ給ふと云ひ伝へれど是ハ云ふ〳〵その
実を隠れさせ給ふて西國に八所舊跡ありまた精
き記録あれども幸ものなれバこゝに省くべし

安方特方

○常陸国の中北辺邑に安方特方地あり是ハ
路崎嶇たる〳〵画一通じ難しよりて雲
岫とよぶ幽谷とよびて出没平原赤〳〵四周聳峙
て古木森〳〵たり終日日光とゞかず洞水の音ハ松陰にあり
て氣膚を侵しこゝの寂莫いはんかたなし〳〵やう〳〵形てた
る小一縷の烟りあり老樹深きところに登りたるよりて
住者ある農夫に問へば彼処が特方あり と云ふ所に行く不
どよその地に入りて見れバ四方高山重〳〵中窪ところあり
松も搖盃の如くあり〳〵赤ちゃけ九軒男女およそ四十九
人あり その風俗素朴にして言語小鳥の如くなるかなる

上古の民はうくあんらくにして衣食住文字を知らずや
蓑衣を織て衣とし抔苔を食して年貢の収納をあすふ一様
なる古より聟帳とくふを以て年貢の収納をあすふ一様
といへども浮るとおしまさ朔も遠ちがといつくるか
ゆ寛延三年宮聟ゆ重し抔重の風俗を貴しまひくるの
時の御書付ふ

一 叡 五懐

拾方百姓
元まり

右く者別る自至農事大切て我御年貢作法之内上納
仕ふ方風義宜ふ不右之通御様被美之下
但し拾坪一両三ケ年作り元□亟之通り

日
悲百姓

右坪百姓共別る風義宜実貞寿右坪拾壱人ゑ拾方今
年分三ケ年年貢作り元仰付に事
その地北質抔おもふべし宝暦の比まで庄屋のみ知りて李彩
あるべと知ずといつるの初代れの地より来りて何の年
ゆ誰とゑ者用發しりやと易るゆ固より文字をくれバ書
留とのふもあるく又ゑ侍へあるざれバ沿く考へうず只蓑拡
ゑるとゑの元祖ありといへ侍へしのみありといつる祖父の名我
弱るふ父の名を知りはでも祖父の名ハ平日用おき者ゆ
ゑれいつるゑ言倉村舊記ゆハ寛永十八年縄入の郡ハ安
吉持方支和の名ありされども前ゑ幾年ぞ
この地あるといふとハさるゆ知るべず今ハ元助とゑ者

三北中の長百姓ゐく拂方安吉ともよ支配ゐ拂方九郎
の中ハ三郎非長氏あり藤十郎者須賀川氏あり
又拂方より三里ゑど楽ゑ嘗りて安寺といふ地ありこれも
同く韜服の民ゐく文字の真用ゑ風俗すづく拂方ゑ
吳ゑもとゑし家ハ拂その男女およそ三千六人ありこれ益
子氏ありとゑ思し居村弥右衛門と云人の料簡ゑく深
山幽谷の中とゑども嘗今文化の用けゑる代ゑ生れ吉ゑ
ら数の文字さ人ゑるざるもそ誠ゑあそれ如べきとありて安
ち拂方北子ども四人と言倉村ゑよびゑく手習とあさゑ
うゑ生ゑ今ハ四人の者ゑ我ゑ名と数字とを覚えと
も故ゑ寛政のえじゑより聲帳とハ止め文字ゑく書

ゑるゑ三ゑゑありゑしゑばかの四人の外ゑるものハ不書のや
うすゑりとゑ此北ゑとよりきハゑて北僻地ゑれバこゑ薄井ゑ
て上古北風俗を存し文字ゑるとも約ゑざるゑ実ゑ結縄
の遺風ゑもいふべしゑゑ文字と約ゑ〻ゑ所謂
渾沌氏ゑ七竅を穿つともいふんゑこゑ再ゑとの聲帳ゑ
ゑすゑやゑゑゑんとゑ少ゑゑれバ三郎ゑ伝利ゑりと
てゑろこびつゑ文化中より又ゑとの如く復し西
聲帳とゑゑゑ延紙を接ぎゑ北ゑ沈ゑゑゑ
と載す年貢納めの時ハ名前書付けゑゑゑも読ゑを拒
ざれバ毎年の庠序ゑて公納するゑ書付の原ゑいゑゑ
遠ゑゑとゑゑ

男体山
トウノキ
小ノ丹
この外
元祖茂左ヱ門墓
とゝ云
ホッキンヤマ
西金砂山
拝方の図

安吉ハ
この辺ニ
あるゝ
高倉村より
上るゝ
小生瀬村
より
上るゝ
墓
元丹宅

聲帳のうら

義房	三三三	擢六	十義
与助	十一三三	元十	四八平
元助	十二三三三	甚助	安吉今
甚平	十一三		
伝兵衛	口十二三三三		
三郎右衛門	口口口口十三三三		
拾方多	口口口口口口三三三三		

右帳よりあらためる口八き今口八弘果十八き夏又一八百又一八拾又八き又の覚えなり

按する小人跡も絶え文字も知らぬ僻地ハいづこを因じ人情あるものなり奥州あるべき南部領鹿角郡田山の聲暦を乞ひて暦のよめざるゆゑ庚申待て暦を考へ村長よりあらかじめ又仙蓋の急境あるべ八般若心経を彩よてうき文字知らぬ法師のよあるとぞこれを聲心経といひぶれもよく似ることあり

乞児の言

○あるふもとの山よ大きなる墳墓あるべ家土多くまるの蘆ふ葬り多りかれバ中元よハ家ようり墓和よ炊籠を具ふこと毎歳の幸なり厚禄の家こそ假屋を造り人をつけ置くもすれその外ハ大ぶ夜の更れバ三ツ捨てゆりぬ

るホトヽ永の要意ども来りて火を打ち蝋燭を奪ひ去り
り例ヨ乞食とおゞ〳〵きめの蔦をとゞろ〳〵卧〳〵居るゞ
それを見て〳〵人の祖考のたゆ〳〵墓ヨすゝめ〳〵るものをさ
やうよ狼藉すまとあゝべゝ〳〵と制〳〵〳〵ヨ要意ども乞
ろともホ罵り〳〵蔦をとゞろ〳〵ものを〳〵いらな事〳〵とつゝ奴ろ
をとゞ〳〵ホそのゝ乞食共〳〵おの〳〵ゞ今するやうあるとを
せぬ故ヨ蔦をとゞろとゞひ〳〵とゞ齊の餓者ハ嘆来の食を
食をざる故ヨこゝホ来るとゞひ〳〵ヨ詰を出ろ似ろ〳〵ろ
くおゞえろ此乞児絆今ホもよろうおん言葡ゝて来
ぬまろといゝゞ〳〵　駿臺雑話

大知小知の辨

○播磨の明石ヨ名ゆ三右衛門と云ハれあり老婆ヨおよび
誕生日ホ諸子孫一族を舎集〳〵席上ゆ〳〵謂やう予ろ
幸ヨ富〳〵ろ〳〵ゞと雖も水旱の時ゆ〳〵ゝるとも〳〵ゞきを
思ろの上人ハ永のうちヨハ不慮の災厄もあるものゆれゞ予
が亡後ヨて困窮ホゆるゝゞきゆハれゝゞ〳〵きもあ〳〵ゞ
先一番ヨ居宅を賣ゞ〳〵ろれゝゝも彫を〳〵せゞ〳〵ゝるゆら
お垂衣の品お賣ゞ〳〵ろの次ヨハ諸の品お衣服を賣ろ
赤裸ヨて田地を耕すゝ〳〵ゝるゞ〳〵大百姓ともいろ〳〵ゝの彫
〳〵ゆろ〳〵人とするゞ〳〵ゝハ誰〳〵もひろ〳〵ホ重宝を質おゞ〳〵
次ヨ諸品お衣服を賣物ろゝ次ヨ田地と〳〵ゝヨ賣ヨて浮
ホ居宅を賣ゆ居宅を賣ヨて永ゝ〳〵ホゆ〳〵ゆ〳〵

よくべき方もかきよ云ることれは恥と知らず大恥と知らず
愚といふべし一番は居宅を夢るハその財を取ることを
主よ準じ萬事を有製すれバ挽回べきの理すぐれハて
よあり又は上因此さ人あれバそつなぐることのそ汝は必ず
恥と知らず大恥と招くとなれといひし孔雀樓
筆記

夢覚の関

○北小路の一姓ふしく二條関白康尼公の家司あり本庄
宮内少輔家孝と云井忠勝の推挙ふく鈴井家の臣とか
るこの家孝夢覚の関ちくことと常よりされし見誠を
の諭あく人ハさぐ物よ驚くべき所多の嘉恕哀樂
も多よ起り人既多よ時く有ることり性人を一人の主事は

てその發動するところよ七情ありてこれは色不及の各き
ハ主事あきらかなる人なりこれよ及すれバ経氣未練此沙
法よあひ珍膳美食は主ふハさかるれ所よ人を奪れて驚
くよう出さう士たるものは茅一よ情く器れ易くさぐらるべ
ものなり又愛よは主感ずるを驚く人なりその義理を
よく考へて浮ふ感ずる財ハ人ありてその姑げいひさ為すと
もそれ感人改らざるものあり人者幾金ある理ハあ
るものの為よ一通りよ感しくを又それ上をそれて八卦を
の言葉を信ずるなりこれくハ一人主とする明徒時をれ者
ありこぐ驚くとふもそれ諸事災の基あり恐ぐ三思一
言九思一行分別して中形ぐくきとあくして結

人の教よりも交るべし偽りなき者を善とするより言行を論じ
勝負ふるこれらも又聲動をもてあれずあるいハ佛書より迷
ひ見聞より耳目を驚し佞情より出れハ則自分おどろきて
居る筋をあらはす書を誠とするところ人生今日の業一まこ
と多夢覺の関を超えん人を誠の人あるべしとやまれしと
なり かくひ草

偽いたす役人

○天下より八偽をいたす役人一人ハなくて叶ぬ本多佐渡守一
生偽をいたす人なり諸事業所の大名佐渡守一言あるべ事
ごとのひゝなり浮世を為ぬより出しなりしと今佐渡守
此言今の人と云

東照宮御一生御口の達ひたる事あるべしと云今川家
より一生偽をいたす人ありて死する所よりのぞこそ我一生偽を
きゝ國家の為ハ大虛言をいたんと云べく一生ゝ為をしば
さやうの事なき者ハ偽をいたすべ死するあるべすべ士の事
ハ偽あれバそれ言と人の信用せなよりてつねゝ考へ
づき事あるべ老談一言記

池田勝入子を試

○池田勝入囲爐裏ゝ自栗をやきて食ひ居ふ子の年十歳
ばかりある子息側ハ居よりて見るゝをその人を試こんと
やおやされ人ハ栗を取り出しそのまゝ出されける
といくいけあるまハ事ゝ考へいとぎきなげ事なく学しめ

〳〵この人生長の浮世田三左衛門とて世を渡る人多り

備前老人物語

諸司代

○土屋但馬守妹男お模寸京都諸司代勤役ありしを北條氏政に禁義帝舎の扶諸司代の諸居らるる座席大床の色ある也よ堂上の低法あきらかなる殊よ扶陰の公事かまこばむるよりよ摂りなきとも多りしさかねて学えけれども是までの席をあらためふの席下よ席とうるる義座せられ〳〵也限あるよえすきうられバるの必序ハ禁中簾外よ学ふくき者ハせざりしとあり明良洪範

後編

若狭の八百尼

○若狭國の白比丘尼とゝハ小松原の人多り浜城東海の畔ふ在りうるる尼の父ある日海よ羽とられる魚をはうるる形いと奇く異常のものよあるべこゝ棄てこれを食べ尼幼しゝ拾ひて食ひ久りとうそハ大さ人魚とゝもの有るべしされバこゝ尼遂よ齢を保つと八百歳よ及び時人八百尼とよびしその尼ゞ肌膚面背こゝ白りうれバ又白尼とも以り尼ある射久よ詩りて以るやう我おゝ〳〵ものあるうふ深羊の盛衰あも遇ひうるしう深義經のこれ地とるるく奥ふ赤くとも見えうきこれうの事を学く人いと怪しこゝるとゞこれや唐土の神仙王母麻姑などの類ひあるんと云

了中原康富記ニ文安六年五月若狭白比丘尼上洛又東
國比丘尼於洛中致談議事と同録のこあり其精きこと知
るべしずとんどもこれよりても白比丘尼の名世に知る
ことなるべし今按その住しとする洞穴あり若狭国遠
山の麓空印寺の境内ふくゝ大なる巖を切り穿つこと壹丈
四方ばかり洞の西北方数十歩ニ石仏あり白尼これ石仏と
なるゝ人とゝろ欲願て地に倒れその多年まゝゝとゝ

若耶
羣談

按ずるに小卧雲日件録文安六年七月二十六日の條に
時八百歳老尼若州より洛ニ洛中のあれ爭觀らん
堅く居るところの門戸と閉ゝ人ゝ容易く看せしめば
るゝれば貴者八百錢を出し職者を十錢を出すあるゝざ
ま門ニ入ることを許さんと是ゝ白尼の世に変ずる
これを併せて考ゝ證すべし按信景の志保之里塘而が
笈袋隨筆あるに記し清若錦が八百尼記ありとゝ